渋沢栄一の生き方（３）

１　帰国（明治元年）後、駿府（現在の静岡県）の慶喜の元へ

フランス滞在が 10 ヶ月ほどを過ぎた頃、栄一の元に日本から驚きの知らせが入りました。それは、江戸幕府が終わり、天皇に政権を返した（大政奉還）という内容です。とはいえ、昭武の留学は５年を予定していたので、栄一達はまだまだ帰るわけにはいかない状況にありました。そんな中、鳥羽・伏見の戦いが起こると、慶喜が大阪城を退去して旧幕府軍は敗北。慶喜は出身藩の水戸で謹慎することになります。情勢はめまぐるしく変化を続け、明治元（1868）年９月になると、ついに新政府から昭武に帰国命令が出されます。一行はフランスを出発し、11 月３日に無事到着したのでした。

栄一は昭武から水戸に来るよう誘われましたが、一橋家の家臣であるからと断りをいれると、水戸から静岡に移った慶喜のもとを訪ねます。

再会した慶喜は、栄一が静岡に来たくれたことを大変喜びました。慶喜はさっそく栄一に「勘定組頭」（静岡藩の財政を司る勘定頭の直属の部下）の地位を与えて、財政再建の現場のトップとして抜擢しました。そんな慶喜の期待に、栄一は見事に応えます。フランスで学んだ、個人に元手がなくてもたくさんの「株主」からお金を預かって商売をして、もうけが出たら「株主」たちに分配するという仕組みを、栄一は具体的に実践したのです。それが、日本で最初の合本（株式）組織「商法会所」です。

２　大隈重信の説得で官僚になる

明治２（1869）年 、栄一は明治新政府より突然「民部省租税正に任ずる」という命令を受けました。この役職は今でいう国税庁長官のような重要な役職です。明治新政府は、栄一の活躍ぶりをつぶさに見て、政府にとってなくてはならない人材であると思っていたのです。しかしその時はちょうど静岡藩の財政改革が軌道に乗り始めていた頃で、栄一は今辞めてしまったら慶喜に申し訳ないという想いを強く持っていました。断りを入れるつもりで出向いた東京で栄一を説得したのが、大蔵大輔（現在の次官）であった大隈重信でした。重信の熱心な説得により、栄一は大蔵省への入省を決心します。

入省した栄一を待っていたのは、廃藩置県という大問題でした。しかしこの困難な課題に対しても、栄一は様々な処理案を早急に立案することで存在感を示し、自らの評価を確実に高めていきました。官僚として手がけた仕事は、物納から通貨に改める租税制度の改正、郵便制度、貨幣改鋳、公債発行をはじめ、さらには官庁建築、鉄道施設案など多岐にわたります。栄一は多様な実務をこなしながら、近代日本の基盤づくりに奔走しました。

しかし明治 6（1873）年、大蔵卿となった大久保利通と対立すると、井上馨らとともに大蔵省を辞め、栄一は実業界への転進を決断するのです。

大蔵省在職当時の栄一 渋沢史料館所蔵

大隈重信　早稲田大学大学史資料センター所蔵